【ねがいましては】

平成２４年６月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２６０号

「生きようとする力」

私が思う、本来の勉強のあるべき姿は、生きようとする力を育むことであると思っています。文部科学省のホームページなどを見ていると、よく『生きる力』という言葉が出てきます。私はもうひと押しして『生きようとする力』と表現したいのです。「何が何でも生きさせていただきます。どんなに辛くても、どんなに悲しくても、歩きまっせ。」

その姿を率直に受け入れられるのが、スポーツなどの視覚によるものです。勝ち負けがはっきりしていて、その精一杯の姿に見ている側は感動を覚えます。しかしそこには気をつけねばならないことがあります。味方のチームに対する愛情は大きく育つかもしれませんが、相手側のチームに対する敬いのこころが育ちにくいということです。

向こうもこちらも同じ人間、今までの辛い練習を同じように積んできた仲間なのです。お互いに気持を共有できる最も距離の近い存在なのです。だから試合が終われば互いに『ありがとう』・・・・。これは練習が辛ければ辛いほど共有可能なものかもしれません。

子どもたちに問いかけます。「運動会で、特にリレーなどで、相手のチームの子が転んだりすると、君たち喜んだりしてないかい？　それって相手の不幸を喜んでいることだよね。　それって良いこと、悪いこと・・・・。」こどもたちは黙り込んだまま。「そうか・・・・・。」

リレーで、自分の足が何かの拍子で、となりの子の足に引っかかり、となりの子が転んでしまった、その時、とっさに走るのをやめ、転んだ子のところへ駆け寄り「ごめんね、だいじょうぶ？」と声をかける子がいたとしたら・・・。見ているものの側からしたら、思わず拍手です。わたしは心から拍手を送りたいのです。きっと、リレーが終わったあと、「何で走るのやめちゃったんだよ、負けちゃったじゃないか。」などと、文句を言ってくる子がいるかもしれません。その時こそ、教育者や保護者の登場でないでしょうか。なぜ拍手だったのか・・・・・。

勝ち負けではなく、そこにある『生きようとする力』・・・・・。

私はすべての子たちにそんな心根（こころね）を持っていただきたいと思います。それをそのまま勉強の世界にも広げたい・・・・・。同様な質問をすることがあります。「君たちさ、テストが返却される時、となりやライバル視している子の点が気にならない？　その時、その子が自分よりも低い点数だったらいいのになって思わない？」「・・・・。」

同様なこころは私たち大人の世界でも同じこと、常にご近所や同じクラスのお子さんの成績を気にし、我が子の方がどうか成績がよければ良いのだが・・・・・。

先ずは大人たちからの改善が必要なのではないでしょうか。政治の世界でも同様、与党側の方が、ちょっとした失言やミスをしようものなら、すぐさま問責決議案、相手をとことん批判する。国会中継で見られるヤジの応酬。

などなど、見ていてなんとも不快な光景が当たり前のように放映されます。子どもたちはそれを見て、これが大人の世界なのだと学んでしまったら・・・・・。

生きようとする力、自分のために生きるのと、人のために生きるのと、どちらが力が湧いてくるのか。答は一目瞭然です。生きようとする力、学校での勉強、ここに問題が発生します。自分のために必死になって勉強する子は今やなかなか見つけることはできないような気がいたします。では家族のために必死になって勉強する子はどうでしょうか。これはあるひとつのリスクが色濃く現れます。「お母さんに褒めてもらいたいから。」と、こたえる子が多いはずです。でもこれは裏を返せば「お母さんに叱られたくないから。」になります。今や勉強の世界は、こちらの方が圧倒的になっていると感じます。ここからわかること・・・・・「生きようとはしていない」です。

学校での成績は、一方（ひとかた）ならぬ親の期待が発生いたします。その期待は彼らの中に大きな重圧となり、しだいに気持ちはネガティブな方向へと変化いたします。やがて、テストでとんでもない点を１回でも取れば・・・・・。もうそこから先はひたすら「勉強から逃げたい」の一方通行になってしまいます。

先ほどのリレーの中で起こったドラマ、転んだ子のそばに駆け寄って、すぐさま「だいじょうぶ？　ごめんね。」と声をかける我が子を見、たとえチームがビリになったとしても、こころから大きな拍手を送り続けるはずです。

お子さんが勉強から大きな痛手をしょってしまった。そんな我が子が必死に這い出そうと向かっている姿、その現場で大きな拍手を送ってあげてください。そこはそっとしておいて、結果をもってきた我が子に叱責をしていませんか。

それではリレーの際に、「なんでビリなんか取ったの、なにやってんの・・・。」と、叱りつけているのと同じです。

大切なのはその経過・・・・・。会社でも同様、毎日必死に働くお父さん。でも、給料のたびに、「なんであなたは毎月こんなにお給料が安いの・・・。」と言われたら、きっと生きる気もなくなってしまうかもしれません。

最近、勉強に大きな痛手を負った子たちが多くやってきます。その子たちは学年差を気にすることなく、実にまじめに取り組もうといたします。わたしは褒めちぎります。その過程を、生き方を・・・。

次第に目の色が変わってまいります。自分を認めてくれる人がいた・・・・・。理解してくれる人がいた・・・・。

でも、その理解者の一番は、私ではあってはならないと思います。

それは『家族』です。